

八槻近津別當

〔集古文書五十三〕祐鏡契約狀

於菊田庄四十五郷先達相續之人體代々可致契約ニ右背此旨者出該旦那可有御成敗候、以此段
□書□□候、依爲後日如件、

明應六年丁乙三月十四日

菊田淨月院祐鏡判

八槻別當江

〔奥の細路〕心もとなき日數かさなるま、に、白河關にかゝりて、旅心定まりぬ、略中とかくして越え行くま、に、阿武隅川をわたる、左に會津根高く、右に岩代相馬三春の莊、常陸下野の地をさかひて山連らなる、

〔吾妻鏡十九〕承元四年五月二十五日壬子、陸奥國平泉保伽藍等興隆事故、右幕下御時、任本願基衡等之例、可致沙汰之旨、被殘御置文之處、寺塔追年破壞、供物燈明以下事、已斷絶之由、寺僧各愁申、仍廣元奉行、如故不可有懈緩儀之趣、今日被仰寺領地頭之中云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年五月十日丁酉、江民部大夫以康問注奉行之間、就有非勘之咎、被召放所領一所訖、而可有御計于傍輩中之由、兼日被儲其法、可賜宮内左衛門尉云云、是紀伊五郎兵衛入道寂西與同七郎左衛門尉重綱相論、陸奥國小田保、追入若木兩村、御下知事也、

〔白川文書〕當國依上保、令知行御年貢無懈怠、可令致御沙汰者、依天氣上啓如件、

建武元年三月十八日

右少辨寺甘露判

謹上 陸奥宰相中將殿家顯

御判

依上保可有御知行事、綸旨如此、先退前給人代官、年貢不散失之様、可被加下知之旨、國宣候也、仍執